

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号： 6 2 6 0 8  
 研究種目： 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）  
 研究期間： 2016～2019  
 課題番号： 1 5 K K 0 0 6 7  
 研究課題名（和文）夏目漱石によるイギリス受容 小説理論の構築の一環として（国際共同研究強化）  
  
 研究課題名（英文）Natsume Soseki's Reception of Great Britain: Constructing a Theory of Literature  
 (Fostering Joint International Research)  
  
 研究代表者  
 野網 摩利子 (NOAMI, Mariko)  
  
 国文学研究資料館・研究部・准教授  
  
 研究者番号： 6 0 5 8 6 6 6 8  
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,300,000 円  
 渡航期間： 8.5ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究により解明されたのは、日本近代文学者による文学構想が、世界文学を読むことから進展したそのプロセスである。日本や近代に限らず、世界および前近代にも文学の種があり、作家自身の生い立ちをはるかに越えて創作の着想と展開とがある様態を明らかにした。その明確化のために、遺伝学のエピジェネティクス論に示唆を得た、「文学の「DNA」」という理論用語を新設した。  
 英国・ブルガリア・米国・日本の研究者による国際共同研究であり、大規模シンポジウムを2回、オックスフォード大学および国文学研究資料館で開催した。共著『世界文学と日本近代文学』にて上記理論を示し、日本近代文学を用いて実証している。

#### 研究成果の学術的意義や社会的意義

主たる成果は2019年11年に公刊した『世界文学と日本近代文学』である。編者の野網摩利子の他、国際共同研究のメンバーであるダリン・テネフ、マイケル・ボーダッシュ、スティーブン・ドッド、小森陽一、リンダ・フロレス、谷川恵一を著者とし、12本の論文を収める。「文学の「DNA」」という新しく提案した文学概念によって、一国の文学研究に囚われない文学の材源研究が可能になったばかりではない。世界文学から得た発想源が温められるうちに急速に進展することについて、最新の遺伝学エピジェネティクス論をモデルに文学理論を提示した。文学研究と生命科学との架橋を可能にした点において、学術的・社会的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）： This study elucidated the process by which the ideas of literature by modern Japanese writers have developed through the reading of world literature. It clarified how the seeds of literature exist not only in Japan and the modern era, but also in the world and the premodern era, and how the idea and development of a creative work extends far beyond its author's background. Taking hints from the epigenetic theory in genetics, it established a new theoretical term called the "DNA" of literature to clarify this process.

The study was an international collaboration by researchers from the United Kingdom, Bulgaria, United States, and Japan, and two large-scale symposiums have been held at the University of Oxford and the National Institute of Japanese Literature. The above theory and its application to modern Japanese literature are demonstrated in the co-authored volume World Literature and Modern Japanese Literature.

研究分野： 日本近代文学

キーワード： 世界文学 文学理論 日本近代文学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本近代の文学の担い手は、敗者側となった江戸幕府時代の文学に育まれる揺籃期を経ている。現在、日本近代文学研究は、近代と前近代とを分断し、研究の範囲を狭めているが、実作者の現実は、まるで異なる。明治以降、洋学を旨とした者はそもそも漢学の素養のある者であって、東アジアの歴史に立脚したうえで、西洋史を見ていた。

彼らが西洋近代を参照して近代とは何かと考えるとき、見ていたのは同時代西洋ばかりではない。日本近代の文学者は、西洋近代の中興期の 18・19 世紀に大いなる関心を注いでいた。民衆の革命闘争史を織り込んだウォルター・スコットが明治初期にさかんに翻訳されたのもそのような理由によるだろう。

日本近代草創期から文学に関わった者の志向性の全体を明らかにするには、日本近代文学研究の前提する認識の枠組み自体の転換を要する。

(2) (1) に示した問題意識から、西洋近代の 18・19 世紀と、日本近代の 19 世紀末から 20 世紀とを複眼的に検討する必要性を痛感した。その知見を備える者を揃えるには、国際共同研究以外にないとの考えに至り、英国 2 名、ブルガリア 1 名、米国 1 名、日本 3 名で研究を開始した。

## 2. 研究の目的

(1) 西洋近代において民衆闘争史とともに、発掘されたり創作されたりしてきた文学が、維新戦争を経た明治の文学者に感銘を与えたのではないかという見通しに基づき、近代文学成立基盤における、歴史と文学との緊迫した産出関係を明らかにする。

(2) 現実の文学の成立状況において集められる材料やヒントは、時代や空間を区切って見出されたものではない。文学が生まれてくるのは、接しうるあらゆる韻文・散文との交渉、また、他学芸や他地域の歴史との交渉においてである。作家の知が貪欲にグローバルである以上、研究もグローバルでなければならない。

この信念のもと結集したメンバーによる国際共同研究を、真に、世界の研究に供するには、科学として提出することが求められる。つまり、他の文学研究にも応用可能な論理性と方法論とを備えている必要があり、その理論の考案もまた、本共同研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

(1) 上掲の研究目的(2)を達成し、打ち立てた文学理論がある。「文学の『DNA』」論である。作家の生活圏の延長線上から得られるような要素に絞って検討する各国文学研究と異なり、地球上のあらゆる空間、歴史上のあらゆる時間から、作家が主体的に自身の知性と感性とに刺激を受けたものを取り込むことによって、それらが自己触発を繰り返して増殖し、文学作品産出に至るという過程を理論化した。

生物学・医学において、出生後に遺伝子に装飾の加わることを考察するエピジェネティクス論を参照し、このような「文学の『DNA』」論の創始に至った。

(2) 「文学の『DNA』」論を用いて国際共同研究メンバーはそれぞれの文学作品の成立契機となる示唆をもたらした世界文学を特定し、これまで見出されていなかった因果に形を与えた。

ウォルター・スコットをはじめとして近代の実力ある作家は、18 世紀における民族闘争と深い関わりのある、古い文学の発見に注目し、自身の作品に取り入れている。近代草創期の日本の作家も、他人事ではない歴史と関わる文学に刺激され、その翻訳を手掛けるところから文学者としての歩みを始めたとすら指摘できるだろう。

ゆえに、研究代表者はその古典発見と民族闘争との如実な連関を窺えるスコットランドに複数回出向き、とくに漱石が長期滞在したハイランドのピトロクリで、その歴史と口承文学とを収集する方法を採った。

## 4. 研究成果

### (1) 国際共著学術書の公刊

本研究は、国際共同研究によって練り上げた理論、ならびに、日本近代文学を用いての綿密な実証例を、世界に向けてつぎの共著で問うた。

・野網摩利子編『世界文学と日本近代文学』共著者：野網摩利子、ダリン・テネフ、マイケル・ボーダッシュ、スティーブン・ドッド、小森陽一、リンダ・フローレス、谷川恵一。東京大学出版会、2019 年。

本書は、日本近代文学に密接な関係のある世界文学を見出し、その世界文学と関わって日本

近代文学が産出される過程を析出した。作家が世界の文学を読むことで引き起こされる創作意欲を捕らえることを試みている。日本近代文学作品ならびに日本近代における翻訳作品が世界史・世界文化の摂取により生成する現場を提示した。作家自身の世界文学の読書歴に基づくことに留意し、実証性を担保し、典拠等の立証を経る。同時代日本から得られるようななかば先天的な既得の要素に対し、大幅な内的変革が、世界文学の環境を引き込むことで進行し、自己触発を繰り返して増殖し、爆発的展開を遂げ、文学作品産出に至る。その様態の研究であり、新しい文学研究の提示となった。

理論的には、生物学・医学において出生後に遺伝子に修飾が加わることを考察する最先端研究をモデルとした「文学の‘DNA’」という新しい文学概念を創設する。出版の翌月に中国で新型コロナウイルスの感染が報告され、その後、全世界に憂慮すべき事態が拡がったが、本書で世界共通の基盤造りのために提案した、親から子へという伝わり方ではない伝染のありように関する文化面からの研究は、きわめて現代的課題であり、人文系の研究として最前線に位置する。今後、世界の研究者にひろく周知すべく、また懇懇もあり、現在、*From World Literature to Japanese Modern Literature* と題した英語版の作成に取り掛かっている。

## (2) 学術論文の公刊

上記『世界文学と日本近代文学』は、日本近代文学の成立実態を、創作にヒントを与えたであろう世界文学の‘DNA’から解明する。世界文学論の新たな方法の提示である。編者の野網は「はじめに」「あとがき」により、本書が、日本近代文学研究から行う世界レベルの知の再編成であることを示した。私自身の論考として収めるのはつぎの2本である。

・野網摩利子「古謡と語り 漱石の翻訳詩から小説へ」

文学の翻訳をほとんど行っていない漱石の訳した、18世紀に発見されたとされる3世紀の叙事詩『オシアン』、同じく18世紀に発見された古英詩、ならびに、能になった『平家物語』異本を取り上げ、それらの共鳴によって促される文学生成の現場をあぶりだす。漱石が『オシアン』から部分訳した箇所は、盲目となったオシアンの語る物語詩中の登場人物が所望した話である。また、漱石旧蔵書にあるやはり18世紀に発掘された古英詩集に、盲目の歌人の語るバラッド詩があり、あわせ論じた。漱石『行人』には、盲目の平家語りを謡う場面があり、そこに結実したとする。小説による再創造を促す声の文学の力について材源とともに明かした。

・野網摩利子「文学の生命線 『リリカル・バラッズ』から漱石へ」

漱石『彼岸過迄』には登場人物にワーズワスおよびコウルリッジによる『リリカル・バラッズ』の知識がなければ出てこないモチーフが多出することを指摘する。短篇同士の突き合わせを要する短篇連作形式のこの小説は、登場人物が読書で得た世界と現実世界とを結びつけるといふ、登場人物の脳内の循環を表すと論証する。

後者の論文は、つぎの学術論文とあわせて大きな研究成果となった。

・野網摩利子「小説の連続性と英詩の役割 『永日小品』をつなぐワーズワス詩」(『書物學』第18巻、2020年7月発行予定)

他に、世界思想(哲学および心理学)が漱石に取り込まれていることを具体的なテキストの叙述の一致から導き出したつぎの2論文も、本研究の重要な成果である。

・野網摩利子「思想との交信 漱石文学のありか 【上】」(『書物學』第12巻、2018年2月)

・野網摩利子「思想との交信 漱石文学のありか 【下】」(『書物學』第13巻、2018年8月)

本研究は文学が同時代の手近な要素ばかりから示唆を受けているのではないことを立証する。日本古典の口承文学や芸能もまた、近代小説を育んだことを論証すれば、学的貢献は大きい。つぎの学術論文がその面からの成果を挙げた。

・野網摩利子「古譚と『草枕』」(『日本近代文学』第98集、日本近代文学会、2018年5月)

日本近代文学も、古来より伝承され、組み替えられ、芸能になりつつ展開してきた文学を下敷きにして成立していることについて漱石『草枕』で証明している。小説の言葉に、身体性の次元をもたらしたのは、身振り手振りをともなって伝えられてきた口承文学や、近代作家の身体を揺さぶった芸能である点、また、一見近代的な激しい言動であっても、精査を施せば、前近代から受け渡されてきた一連の言葉と身体のふるまい・活動に由来する点について明らかにした。

## (3) 学術書の公刊

日本近代文学の種子となった「文学の‘DNA’」が見つかるのは、西洋近代や日本の前近代ばかりではない。日本の文学者を支えてきた教養として決して見過ごせないのが漢籍である。とりわけ、同時代より少し前の時代の中国の文献は、日本において古代から近代まで、知識人が最も参考にする書物であった。その当然の事実も、本研究において掘り上げている。代表的研

究成果はつぎの単著である。

・野網摩利子『漱石の読みかた 『明暗』と漢籍』平凡社、2016年。

本書は、小説の文面を越えて広がる文化の奥行きを見せた点で、汎用性の高い学術書となっている。日本の近代小説の『明暗』に出てくる明・清時代の漢籍をひもとけば、登場人物の思考・行動がすでに書き込まれているような面白みがある。漱石が漢籍をふまえていたことの証明のみならず、それらの書物を登場人物が読めるように配置してあることの意味を明らかにした点が肝要と言えよう。

夏目漱石が少年期より見ていた現実空間も照射している。明治は民衆でも文人になり得る初めての時代であった。登場人物による、文人らしい読書と詩作まで総合され、長編小説が屹立することを論証した。まさに、登場人物にも埋め込まれた「文学の‘DNA’」を証明したのである。

#### (4) 国際学会における研究成果の公表

『世界文学と日本近代文学』に結実した本国際共同研究は、つぎの2回の大規模国際シンポジウムにおいていち早く研究成果を公開した。

・第1回シンポジウム“Literary ‘DNA’: World Literature and Modern Japanese Literature”、2016年12月9日、於 英国、オックスフォード大学ペンブルックカレッジ(英国)

野網摩利子(国文学研究資料館)“Making a Promise: The Impact of Old English Ballads and Romances on Sōseki”

スティーブン・ドッド Stephen Dodd(ロンドン大学 SOAS(英国))“The Changing Rooms of Modernism: Franz Kafka's 'Metamorphosis' and Uno Koji's 'Yume miru heyra'”

リンダ・フローレス Linda Flores(オックスフォード大学) Narrating 'Another Self': Mauriac and the Literature of Takahashi Takako”

ダリン・テネフ Darin Tenev(ソフィア大学(ブルガリア))“Conversations with a Cat and the Potentiality of Literature: On Colette's 'La Chatte' and Tanizaki's 'Neko to Shōzō to Futari no Onna'”

この第1回シンポジウムについては、Japanese Studies at Oxford(2017)に“Symposium on ‘Literary ‘DNA’: World Literature and Modern Japanese Literature”と題する報告を載せた。

・第2回シンポジウム「文学の‘DNA’ 世界文学と日本近代文学 The ‘DNA’ of Literature: World Literature and Modern Japanese Literature」、2017年6月9日、於 国文学研究資料館。

野網摩利子(国文学研究資料館)「リリカル・バラッドと漱石小説の世界」“Lyrical Ballads and The World of Sōseki's Novels”

ダリン・テネフ Darin Tenev(ソフィア大学)「世界文学のエピジェネティクス」“Epigenetics of World Literature”

スティーブン・ドッド Stephen Dodd(ロンドン大学 SOAS)「運動としてのモダニズム ニカラグアから日本へ」“Modernism as Movement: From Nicaragua to Japan”

小森陽一(東京大学)「『坊っちゃん』の世界史 ラファエロからゴーリキーまで」“A World History of ‘Botchan’: From Raphael to Gorky”

マイケル・ボーダッシュ Michael K. Bourdaghs(シカゴ大学(米国))「漱石の(反)世界文学と(反)翻訳」“Sōseki's (Anti-)World Literature and (Anti-)Translation”

谷川恵一(国文学研究資料館)「世界文学の文体チューニング ローザ・ルクセンブルグの手紙」“‘Style Tuning’ in World Literature: Rosa Luxemburg's Letters”

研究代表者の野網は、2016年8月より2017年3月までオックスフォード大学東洋学研究科にアカデミックビジターとして在籍し、上述した研究方法を採りながら、本共同研究を推し進めた。

他に、研究代表者が本研究成果を国際的に示した重要な講演として、つぎの2回がある。

・野網摩利子“Histories, Ballads and Novels from the Perspective of Soseki's Association with R.L.Stevenson”(2016年11月4日、於 ソフィア大学(ブルガリア))

本研究において、漱石の読み込んでいた西洋近代文学中に具えられていた前近代への視野が漱石に影響を与えたというのは重要な論点であり、その内容の発表である。

・野網摩利子“Translation of Poems: Sir Walter Scott and Natsume Soseki”(2017年3月14日、於 エディンバラ大学(英国))

漱石自身の古代英文学研究、ならびに、スコットランド近代作家の古代研究との相関性を探った。本講演は長時間にわたるものであったが、その一部を学術論文「ウォルター・スコット

の明治と漱石」(『倫敦塔論集 漱石のみた風景』和泉書院、2020年8月発行予定、所収)に収めた。

このように本研究は、国際共著、および、学術書の発刊、大規模国際会議の主催、学術論文ならびに招聘講演による研究の公表等、研究成果をつぎつぎと世界に問うてきた。すでに国際的に注目されており、上述の *From World Literature to Japanese Modern Literature* の著者に加わりたいとの打診を、複数のヨーロッパ諸国の研究者より受けている。

本研究が成し遂げた理論的達成と実績とは、確実に文学研究に新しい局面をもたらすであろうと予想される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 野網摩利子	4. 巻 18
2. 論文標題 小説の連続性と英詩の役割 『永日小品』をつなぐワーズワス詩	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書物學	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野網 摩利子	4. 巻 98
2. 論文標題 古譚と『草枕』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 87 - 99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） <a href="https://doi.org/10.19018/nihonkindaibungaku.98.0_87">https://doi.org/10.19018/nihonkindaibungaku.98.0_87</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野網摩利子	4. 巻 13
2. 論文標題 思想との交信 漱石文学のありか【下】	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書物學	6. 最初と最後の頁 43 - 50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野網摩利子	4. 巻 12
2. 論文標題 思想との交信 漱石文学のありか【上】	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書物學	6. 最初と最後の頁 37 43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Noami, Mariko	4. 巻 9
2. 論文標題 1st Symposium on Literary 'DNA': World Literature and Modern Japanese Literature	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Newsletter (Japanese Studies, Oriental Institute)	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 野網摩利子
2. 発表標題 漱石文学に生きる伝承
3. 学会等名 高麗大学校フォーラム「東アジアにおける知の往還」第3回 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野網摩利子
2. 発表標題 リリカル・バラッドと漱石小説の世界 Lyrical Ballads and The World of Soseki's Novels
3. 学会等名 The 'DNA' of Literature: World Literature and Modern Japanese Literature (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Noami, Mariko
2. 発表標題 Histories, Ballads and Novels from the Perspective of Soseki's Association with R.L.Stevenson
3. 学会等名 Sofia Literary Theory Seminar (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Noami, Mariko
2. 発表標題 Making a Promise: The Impact of Old English Ballads and Romances on Soseki
3. 学会等名 Literary 'DNA': World Literature and Modern Japanese Literature (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Noami, Mariko
2. 発表標題 Translation of Poems: Sir Walter Scott and Natsume Soseki
3. 学会等名 Japanese Studies at the University of Edinburgh (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 野網摩利子、小森陽一、松岡心平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 能と漱石	

1. 著者名 荒木浩、野網摩利子他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 投機する古典性 視覚 / 大衆 / 現代	



1. 著者名 鳥井正晴、野網摩利子他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 倫敦塔論集 漱石のみた風景	

1. 著者名 野網 摩利子、ダリン・テネフ、マイケル・ボーダッシュ、スティーブン・ドッド、小森陽一、リンダ・フローレス、谷川恵一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 332(i-v, 113-131, 231-250, 293-296, 297-300)
3. 書名 世界文学と日本近代文学	

1. 著者名 山口直孝、野網摩利子、齋藤希史他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 翰林書房	5. 総ページ数 207(86-104)
3. 書名 漢文脈の漱石	

1. 著者名 野網摩利子・阿部卓也・谷島貴太・生貝直人	4. 発行年 2016年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 277 (166-180)
3. 書名 ハイブリッド・リーディング 新しい読書と文字学	

1. 著者名 野網摩利子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 82
3. 書名 漱石の読みかた 『明暗』と漢籍	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	フローレス リンダ  (FLORES Linda)	オックスフォード大学・Oriental Institute・准教授	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	テネフ ダリン  (TENEV Darin)	ソフィア大学・Faculty of Slavic Studies・准教授	
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ドッド スティーブン  (DODD Stephen)	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院・Department of East Asian Language and Culture・教授	
その他の研究協力者	ボーダッシュ マイケル  (BOURDAGHS Michael)	シカゴ大学・East Asian Languages and Civilizations・教授	
その他の研究協力者	谷川 恵一  (TANIKAWA Keiichi)  (10171836)	国文学研究資料館・研究部・教授   (62608)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
その他の 研究協 力者	小森 陽一  (KOMORI Yoichi)  (80153683)	東京大学・総合文化研究科・教授     (12601)	